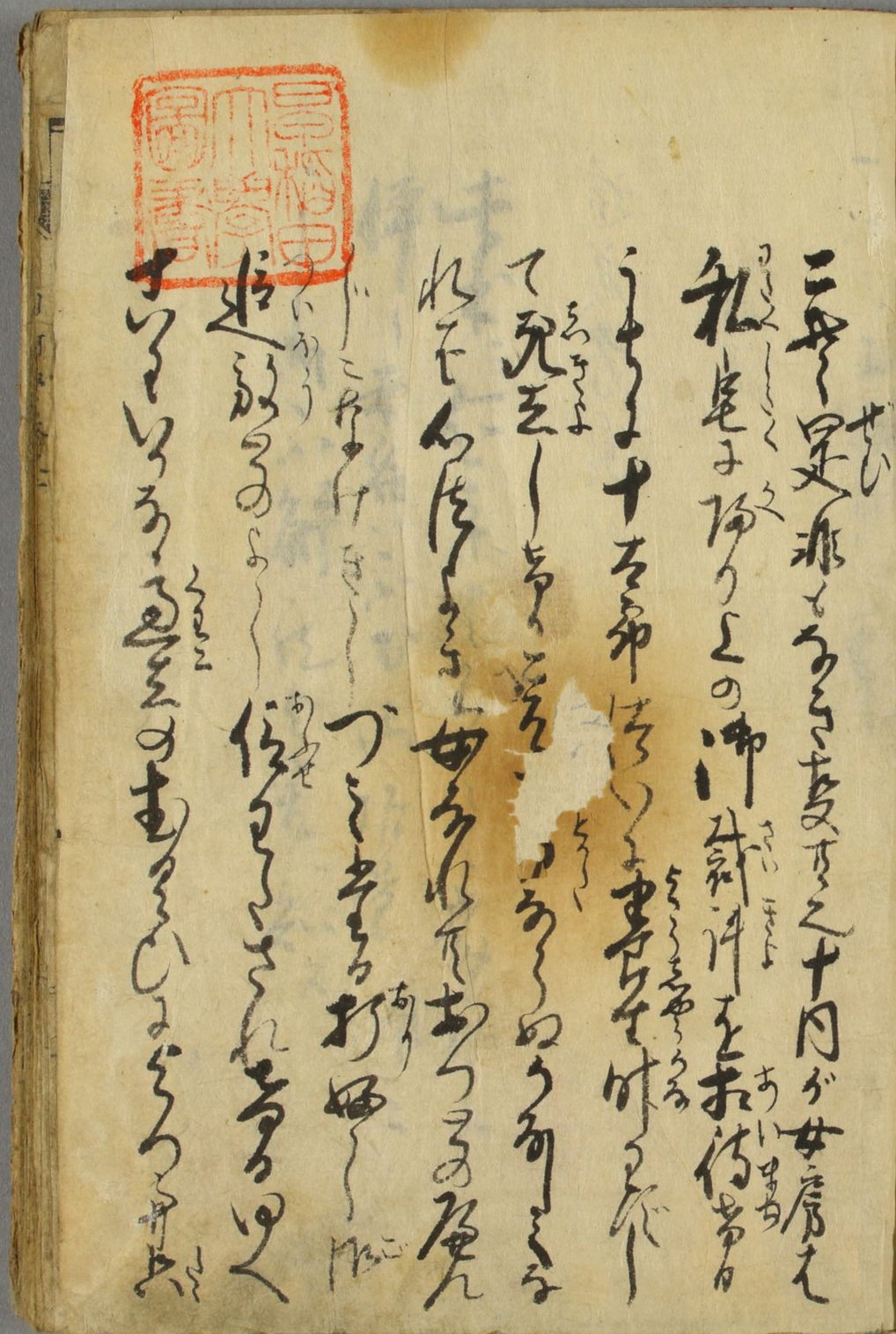
三時

へ13
3909
1

門へ13
號3909
巻1



欽定四庫全書

東西村六卷

國字小說

漫古堂

淳于棼家廣陵。宅南有槐。生豪飲其下。因醉致疾。二友扶生歸。憂二玄衣使者。曰。槐安國王奉邀。生隨二使上車。指古槐入一穴中。大城朱門。題曰大槐安國。有一騎。傳呼曰駙馬遠降。引生升廣殿。見一人衣素練服朱華冠。令生絆王。王曰。前賢尊命。許令女瑤芳奉事君子。有侍姬數十。奉樂執燭引導。金翠步障。珍瓏不斷至門。號金儀宮。一女子號金枝公主。儀若神僊。交驩成禮。情禮日洽。王曰。吾南柯郡。政事不理。屈

卿爲守。勅有司。出金玉錦綉。僕妾車馬。施列廣衢。餞公主行。夫人戒子曰。淳于郎性剛好酒。爲婦之道。貴在柔順。爾善事之。生累日至郡。有官吏僧道。音樂來迎。下車省風俗察疾苦。郡中大理。凡二十載。百姓立生祠。王賜爵錫邑。位居台輔。生五男二女。榮盛莫比。公主遇疾而薨。生請護喪赴國。王與夫人素服。慟哭於郊。備儀羽葆鼓吹。葬主於盤龍岡。生以貴戚威福日盛。有人上表云。玄象譎見。國有大恐。都邑遷徙宗廟崩壞。事生蕭墻。時議以生僭侈之應。王因命生曰。卿可暫歸本里。一見親族。諸孫無以爲念。復令二使者送出一穴。遂寤。見家僮擁篲于庭。二客濯足于榻。斜日未隱西垣。餘尊尚湛東牖。因與二客。尋古槐下穴。洞然明朗。可容一榻。上土壤爲城廟臺殿之狀。有蟻數斛。二大蟻素翼朱首乃槐安國王。又窮一穴。直上南枝。群蟻亦處其中。卽南柯郡也。又一穴盤屈若龍蛇狀。有小墳高尺餘。卽盤龍山岡也。生追想感歎。遺情塞是夕風雨暴發。旦視其穴遂失。羣蟻莫知所之。國記有大恐。都邑遷徙。此其驗矣。

右陳翰槐宮記

槐宮記ハ淳于棼ガ故事ナリ。陳翰嘗棼ガ夢ニ嫁シテ。榮枯得喪ノ理ヲ推ユト。沈既濟ガ枕中記ニ一般。皆是寓言トイヘ𪜈。蒙昧ヲ醒スニ足レリ。予モ亦取ユトアツテ。三勝半七ガ奇縁ヲ述ベ名ケテ三七全傳南柯夢ト謂。事ハ米谷山ノ楠南柯ニ起ル。千日寺ノ南无仏ニ畢ル。文辞荒唐ニシテ。君子ノ一噱ヲ惹ニ似タリ。然𪜈艶曲淫奔ノ脚色ヲ借ラズシテ。勸懲ノ微意毎巻ニ存ス。閲者ノ利害彼ト此ト如何。因テ數行ヲ巻端ニ題スト云

文化四年丁卯夏孟　飯台　簑笠隱屋

總目録

巻の一

深山路の楠
木精の怪異
丹波都ゞ傳

巻の二

稚児の嬶夫
櫛坂の佞人
大柏の權輿

巻の三

臥房の胡越

華洛の僑居

夜轎の驟雨

巻の四

真葛が朝風

百度の願事

夜半の月魄

巻の五

霽猿の宿の上

霽猿の宿の下

主の元園の元

巻の六

橋下の歌舟

長町の五味

千日寺の柾

赤根羊七

あかねひつじしち

笠屋三勝

かさやさんかち

於逸我仏度道

赤根羊六

阿波流使乃民訳

笠松平三

可多巴迺阿芝

園花

南天院殿以鶏

數浪

姓氏

世家

續井順昭　續井吉稚

列傳

厚倉友春　今市全八郎
蟻松典膳　赤根羊七郎
布施蝶九郎　赤根羊六郎
丹波市　笠松平三郎
笠屋三勝　蟻松曾右郎
園花　阿通　蟻松次郎
姓氏果　鞦篠　敷浪

三七全傳南柯夢卷之一

東都　亭馬琴編次

雲方加

深山路の楠

永正年中のころとよ。奈良の都より。続井順昭といふ。ぜんどうの人なりけり。その先祖を尋れば。仏門より出て。武家に交参。法莚清衆の五戒を棄て。兵家闘戦の六具を事とし。建武の播乱より。軍功抜群なりしかば。忽ちに名を真し。大和半国を領して。累世武威をたゝ。武を備へる。家隷ども夥しく。家富昌る。薪より桂を。珠を秤て。身は錦繡戎襲に。美味は飽くまで。只管閑雅耽て。のゝちは世に弄ぶ茶法を好て。京師の北山なる金閣に倣て。新に茶亭を造らんとて。名なる番匠ホを召つゞく。龍門の龍岩下の水。

蓮池鏡湖池九山八海石春日の社夕佳亭すべて寸分も違つぬ繪圖
小字さ〜。既に吉日をえらび作事を奥さんと張ちつゞけり。抑金閣
と字えらへ應永年中の建立にして鹿苑院義滿公の別荘なり。閣は三重
にして七間の露盤に三尺八寸の鳳凰を戴く。第一重を究竟頂と名
づけ。廣サ三間四尺八寸。第二重は潮音洞と稱す。東西七間南北五間
半。岩窟に觀世音と四天王を安置し。第三重は法水院とつゞく。廣サ
第二重に等しく。こゝにも又觀音勢至を安置せり。これらを摸
す。作り生さんるぞ。ふかゝねど。潮音洞の天井は楠の一枚板
をのこす。造らまほしけれど。良材にのぞみの缺くべきを恨る程
に。順昭頻に焦燥てある日老黨を集會。こゝも此度茶亭の天井に用
ふる楠は得がたしと似たれども。當國は連山彼濤のごく鬱累して。樹

木森然として。されば往昔より。松木樵る山賤ホ斧を入るゝ事
ど。山のあらはるゝもえんえどべくもかゝれね谷蔭にのみ生ずるこゝん
楠のごとく求るほどにもなかなかとはいひがたし。羽束の樵夫をして。
殘る隈なく索させよとの仰なりとの蟻松典膳豊度と呼く。老
臣列を出して。こゝに當國添上郡米谷の山間に。伊賀より通ふ頓路
なるが。彼山の半腹より。街道を南のほうへ木垂るゝ楠の大木あるとの故
東南へさし出て。大約八九十丈に餘り。樹の下常に闇して。旅客昏
路に惑へり。この楠を撓しめば四面五七間にわたる枝ときもべしとま
うしとゝ。順昭あらく欣びて。筑紫浮り陸奥の果にあるとかいふ仙
ぬしもあらんに。かゝる良財のごとく知る山より生ずるとは。こゝに幸を
えずして曩にいかえざりしこの楠を伐もべしと仰すらい

乳母子なりける。厚倉二郎右夫友春。すくせ生く諫けるハ。怒特祠の梓樹を伐。陸亭の古木を倒しく。怪異よ遇ひ。唐山の書籍ふ記しく。君もよくありてぞ。やべれ。千載を孫る樹るハ。ふるしく木精あそられを伐ゆの崇をうけしゆハ。枚拳よ遑あしぞ。是併。樹の人ゆ殃をるハあしぞ。天その驕奢を憎ぬふりとあ。彼米答ある楠も。山児ホが斧を脱ま。既よ千載の大木とうりく。その木ハ南。後客の煩とうるを。材ぐよ伐透さるハ深ハ故ありぬべ。かるゆハくなもそひくしのつぶ。後の患ならん孫とのハせもあへど。順昭忽ち気を変そ。ゆそれ友春。ひゆうのゆを洗よハらべれう。物の崇ゆどて恨れよどあハ。婦女ゆのくよあるべ。ふぶ采池よ生とし。活るゆ。ゆのをしが世を孫るハ。ゆる是誰が庶ぞや。既よその澤を蒙りそその恩をるを

あしぶ。物の用ハなくまくそそるしぬ。ないしく草木ハ非情ゆり。汝由ゆれゆをそしく。衆人をみそどしそ。羽ハつとめく。彼山よ赴れどぶうし知しと楠を伐すぐられば。典猪ハ樵夫ホよ今ゆしく。用意せよといそぶしつ。御とゆを立ゆく奥よされハ。厚倉ふしぶ弥ゆを汐ぶ。ゆみ諸ともよ退出りゆ。かして順昭ハ次の日の早旦よ厚倉二郎を夫以下騎の従者をわく。米苦山よ到る小蟻松典脂ハ先ぶしく。樵夫ホを集合しく伺候ちり。その時順昭馬よりりく。床儿よ尻をうけ件の楠を向上ふハ枝葉参差と入りちぶひて半夫を覆ハ。幹のをサハ十歩よ。てゆは繞り果べしもあしぶれば。莞尓とうて左右をえゆり。物ハ求ふしく。集るといどゆりとゆぶるとそその人の徳よありられ又今茶亭を造しんとするよ。天その良材をゆふられしぶ徳ゆり時をうさど

楠を斫らんとして
順昭樵夫たちを傷ム
つゝ井順昭
賀文書丁松夫

其二

伐せうとや知するふりして老髏なる樵夫二三人かとるく。領主のほうり近う
生るくまうをもう畏られど面あらう学えるべしとあり。殿の御威徳を
りくこの樹を伐ると宣るを固辞するあいあらねどこの楠に背よ
て神とゝ崇めるく。朽木樵る男も立ちよりぞ。落葉掻く童も近づくぞ。
えをあつするぞ〳〵周るふ住連を引まとひろ〳〵人の魁とぞよ許さぬるを。
よ〳〵伐らゝ〳〵めんあるぞ天ある崇あるべし。加藤。縣の石ゝ
も堅ゆうよえゝ。輙く斧もちぬ〳〵。廣況大和の山ゝを索ル
この樹よ苏ゝざる楠のるれとあるまじ〳〵られば〳〵みより百日を限て
ゝ殺めるるものどもを伴ひゝ外を索めべゝとまうすぞ。野の
樵夫ホも三人の公羽が後方ふゝ況て〳〵ろせよゝに説ば順昭ゆもあへ
ぶ〳〵とうち笑い泄ホ草鞋大王の放るゆをゆぞや。賈ゝる草鞋も

崇祀ば霊験あり。愚ゝられを情ゝぞこの樹の歳孫ゝるを奇ゝて遠ふ神
と崇れいとと。鬼魅閑両の栖とゝるゝれ。泄ホ伐らばとく伐ぬ〳〵ゝ斧
よ従ずいかゝるべしぞとゝいたまれつ。が伐すゝりとゝ扶ゝ。住連を下とれば。
左右ゝふゝとゝゝれ死ぶ。幣もちゝりと散乱ゝり。樵夫ホいこの形勢をえて
戦慄ぬ。さゝぶゝまゝ枝をあゝいわんとて五七人楠の枝よ攀上て。枝ゝり枝ゝ長
ゝるる麻索を結着ゝ八方ゝ引ゝ。あの〳〵斧をあり揚ゝ。三の枝を丁
と打ば斧が閃りと反ゝり。吹〳〵刪られゝる水使の空ゝり。鮮血ゝゝ濆ゝ。
樵夫ホが面上まゝりかゝるとえゝ。ゝる七人瞑眩ゝ。ゝゝ。もたゝゝず撞
と墮ぬゝゝるるあゝ壓よ打れ。我ゝ斧あゝ。ゝ足を傷られ。半死半生ゝ
ゝの十餘人墮ゝるゝゝ帰死せゝ。ゝすゝ勇死順昭もこの為体よ舌を根ゝ。
ゝひゝるゝゝ気ゝあるをゝゝを夫早暁ゝゝ。声を低ゝ。ゝあるべゝとゝひゝを

わくさの中にしも用ひられぞ。罪なき樵夫を殺しぬ。あやまり過ぐ改るに憚る
ことなかれと。今ハ是まで也。努々乞ひとゞまりぬるぞと諫るに。頓昭ハ一言
の回答もなくして。只顔に嘆息し。ぞがて馬にうち乗て既に去らんとしたり
しが。蟻松典膳をちかく招き。樵夫等が子。その妻子の歎も不便なれハ。死た
るものゝおハ棺をあたへ。傷つきたるものには薬をとらせよと。ゆるされて豊が
を引きへせバ。従者等列を整へ。草葉の露を拂ひつゝ。奈良を差ていそぎ
ぬ。領主さへかくのごとくなれバ。樵夫等ハ是非もなくよわらんよりハなくて。
或ハその友の屍を担ひ。或ハ病るを扶掖て。おのが家に皆帰りたる。小城下
郡佐保庄なる柴賣に。赤根半六といふものありけり。先祖ハ楠正勝譜代恩
顧の家隷なりしが。明徳三年二月のころ。正勝千早の城を落て。十津川に
漂流せし後ハ。大和なる親族をたよりて。佐保庄に住家求しより。今の半

六にほびて既に五代久しく片山里に零落し。柴を賣て活業とすれバ。
文学に疎けれども。朱買臣が青雲の志を羨ぞみにすりして舊の武士
になりなんとひとびとおもひながら。家貧しけれバ。其跡をおそふもなく妻を娶迎
より十年にあまりて。その名を綸篠と呼ぶるがこれも由緒ある武士の
浪人何がしが女児にて。そのよりいかなる艱苦に人となりしれバ
物の哀をもよくしりて。やさしき心に成たれバ。富るかたをもとめず夫が
諫ぞに教るなど。女子にハいと稀なり。一子半七も今ハ十才になりぬ。
その児母にや似たりけん。その性の怜利ハさるもの。容止端正にて。ふり乱し
たるかひ髪も何となく匂やかに垢つきたる針目衣もさすがにひなびず。柴
賣の児にハいと惜しと。親も疎きも稱ざるもなかりたりける。赤根半
六ハこの日樵夫に駈催されて。米谷山に到りしも。梯より落たる

りのふ蹴仆さん。株うと膳を打ゝぐ。二三間轉びあがて。篁竹の中小卧るを。
樵夫どもい只一足もそゝ〳〵ゆゝんとて慌忙ゝ行く。羊六が篁竹よ。覆ひ
躾さんと卧るをちゝ〳〵どゝて。ゆりまろれば。遂ゝ羊日あるう昏絶て。物の
善悪をうたうてど。日も暮ゝ。夜も深ゆくまゝ。梢をうつる山風ゝ楠の末
の露吹ちらひぢゝ〳〵と降くれば。一滴の白雨路。羊六が咽喉ゝ入て。微須小蹇
生ゝどうともういづひるらんと。悲ふれを推鎮めて。ゝ〳〵くのさ〳〵ゝ。
打ゝ〳〵時ゝ昏絶るを。樵夫ホが情ゝ。ゝ〳〵ゝ捨ゝゆりんさも危ち命
拾ゝひぬとひとりごちて。ぞゝ身を起ち。耳ゝ馴ゝる渓水も。行とゝく凄く
月さゝ入て淋もうねぶ。ゝ〳〵呆れゝ忙然ゝる折しも。誰とゝ〳〵ど楠の下
ふゝち相語声すれど。野干玉の闇ゝれば。恐人の間もゝえて。えゝあ中や。彼
処よもうれゝ等ゝく。捨られゝる人ありゝんとて。既ゝ呼びうけんとちゝぶ。ゝ疑ひ

てその相語をゝ〳〵ゝ。一人がいゝ。ゝ〳〵ゝ神かをえゝうゝ。縦須まうの間中
の人を喝ゝと来ゝるとも行ゝのゝを。ちゝぶすゝたとぼとゝるゝゆゝれゝ。一人
荅ゝ〳〵ゝ。ゝ〳〵ゝ。さゝいひそゝ。ゝ知れゝるゝのゝありゝ。墓月ゝて足ゝを整ゝる。
その根ゝ鹿尾菜の烹汁を伏ぢゝけ。ちゝゝて後斧をゝれゝば。今の庵
言もうひゝうゝんとゝのゝ。ちゝめの一人ゝ。ゝ〳〵驚る声音ゝく。ゝゝよみてそゝぎ。
忌ゝとゝいゝねゝのゝぞゝのその期ゝ。ゝんゝゝ。天ゝう命ゝ。ゝ縁故を
ありてゝれを祈ゝのゝぶ。後ゝ清ゝゝゝ。ゝゝゝゝとゝひゝゝゝとゝを。一人
咲もゝあゝを。ゝゝと。ゝ咲ひゝちゝうねゝとゝをゝのゝゝぞゝ〳〵天命ゝゝ
ゝゝ怨ぢゝも止ねゝと回荅てその後ゝ音もゝどゝゝゝゝゝを。ゝ
ゝ。三輪山の神木ゝ。千載経る杉ありゝゝ。世の人のゝる不思て。今みゝゝ
と吸ゝうけゝゝ。三輪の杉ゝゝ。彼処の木精ゝの楠が映ゝゝゝを訪ゝゝ。

米谷山小半六
木精を認る圖

按ずるに法苑珠林
巻第五十八に白澤
圖を引て云木之精
を彭侯と名く狀黑
狗の如く尾は又千
載の木にその中に虫
あり名けて賈誼と
いふ狀豚の如くにして
両頭あり臭ことに
食へば狗の肉の味の如し

又上小山林あり小
川泉ある地理の間
精を生ず名けて必
方といふ狀鳥のごく
尾長これ陰陽変
化の生ところあり
抱朴子云山中の大
樹ふく語る者樹の
語あゝぐその精の名を
雲陽とあ其名を以
て則吉凶を今わ小
述る而ふ事れ小因
まり

こゝより只ゞいそぎぬと鞭び。その夜の明るをまちて山をかゝるに。足の外健なれ。
足の運びも常よりはかどり。程なく路をいそぎて。佐保の庄へ帰りけるとぞ。

木精の怪異

半六が妻篠篠は。米谷山にて人殺されしと伝へ聞て。安き心もあらざるに。
日は暮るゝに夫は立もかへらざれば。いよいよ案じて。一子半七を走らし。彼此
と問すれども。定かにしれるものもなし。あまりに思ひかねて。通宵門口に
立望つ。明がたくなるより。里人を御導して。彼処に索ねくべしとて。飯も
常よりは多く炊て。その準備をしてありけるに。半六恙なく帰りしが。山嵐
の後に花をちらすがごとく。雨夜に月を見る心持して。疵を按ながら半七と
もに。夜べよりのことを語り出て。鉄が其恨てあるべく。ここよる宿する
まひるのことゞまるべく人に言傳ても聞えあらべからず。寝よといひても半
七が共に目睡ずありし。伊り妻も堵て後はすこしも心ゆるみけるにや。
うたゝ寝のひまといふに。半六は茫然とうち咲て。草鞋脱すて炉坑の
辺に坐を占。そのまゝ直に倒れざりしは。此此との故なるべし。傍なる人に蹴
仆され息絶てありしを。一五一十を物かたりて。さていふやう。常言に過の功名
といへるがごとく。それならずとも。身を立家を興すべき時を得たり。その故
は。昨夕米谷山なる篁竹の中に臥して。楠の木精と枝の木精がうち相語
を聞に。彼楠を伐らんには。蟇目をもて木精を蟄らせ。鹿尾菜の煮
汁をその根に注かくるときは。斧を入るゝに容易しといへり。わが先祖は弓
馬の達人なりと聞るが。鳴弦蟇目の射法家に伝へて今に曳あれば。
彼楠を斫て。領主の所蔵に遇て。絶たる家をも再び興べし。なんぢも皆かくれ
しかるのち密語なぞ。半七は父の怪談に膝をすゝめて。顔うち瞻りてゐる

小。論語に。深念して。木精のごとくなる。滅ぶべしとをせり。いと怪しくも作るなるかな。されば。領主の威勢をもて。伐をもてなさるべきを。ぼいろ
なる言をもて。為損じ。世の胡慮とするのごとくなるべし。罪なきを
しる所為なるべし。又為課のごとくその崇あるべんなり。ぞ身にさまざまに
ぶ。くすもの不便。又崇なるべしもせよ。先祖に楠どの小仕く。譜代相伝
の家隷なりと。日来いひ出めひるべし。ぶ。ひさしくあく栄利を計てさとげ
小古主の名をもて負ふ楠を伐ぬるに。名誉自性の理とやうに。未栄ふべく
もありしまでど。智恵才学なるも及ばざれば。世の人の貪福とおもひなえ時
を待ぬるにこそ。ひ安らぬやうにとぶまりぬくとぶと賢くもや
ゆるを。半ばやも果ぞ改をうち掉。物成おもひるとも。婦女子の生平なりぶ小
一の人も。天のなるを取ざれば。却禍を受とこそ。孝常なりて彼樹を

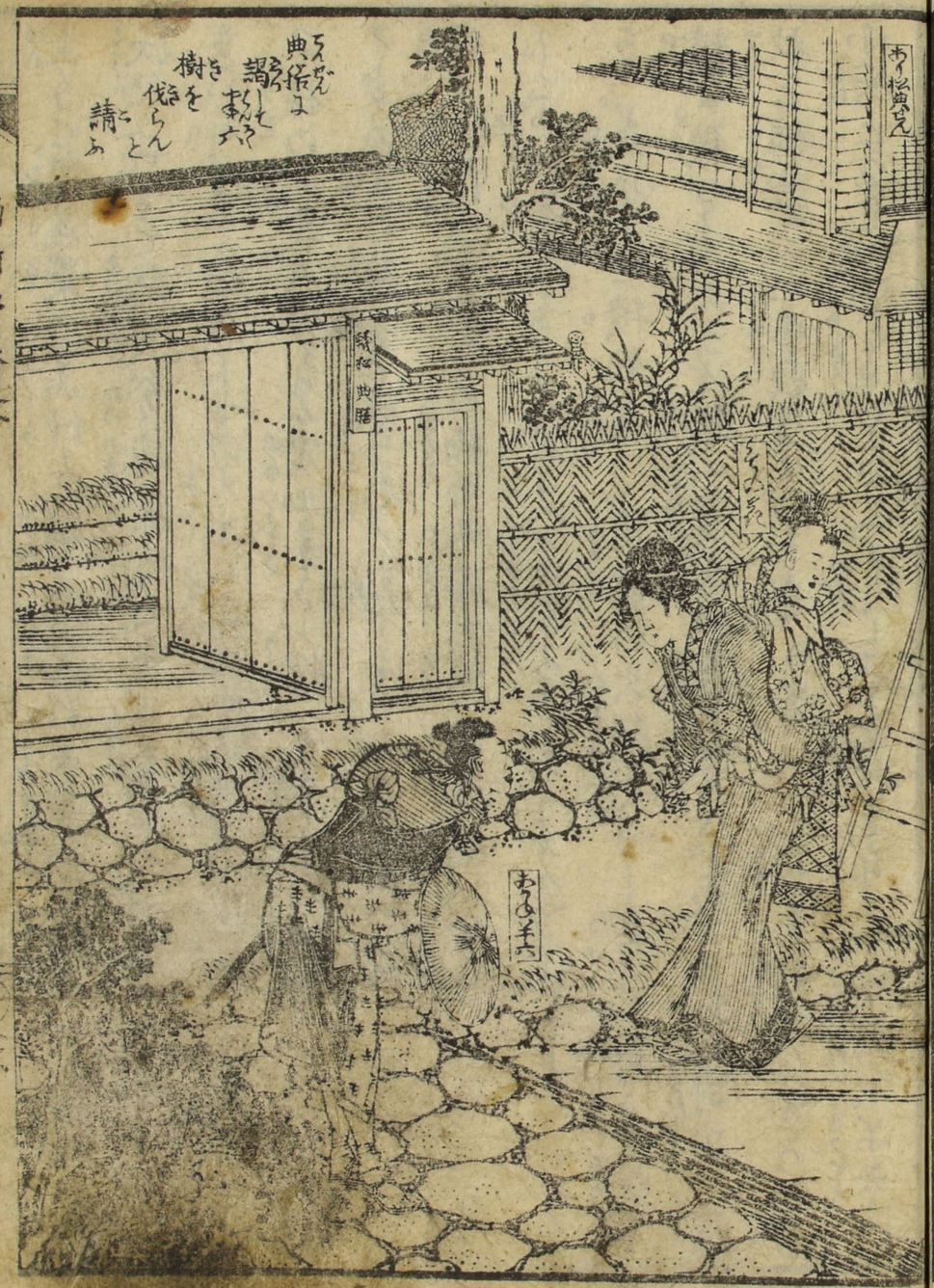
伐らぶ。崇を禀るともあるべんに。法をなくすると云へば。怕るふ足るべし。又楠い
古主の名氏なれば。伐らぶとりのとりと愚なり。世よ久米氏よ仕る人い。
主の名氏とて。米を食べるべいあるべいもるぶ身ひとつのあるべいあるべ。
身らぶ嫁をとり。既に鬱の春秋い孤ぶとど。身ふ楠に。ふ粮。それ
を懶しとらふ。気色もなくなるべいねどぶ。ぶるべ。人をこそ勝るまじを。
世よもちられぬ深山木とする果んなる。ひとをしるべや。婦怜悧に。牛
賣ことのみとどいふるべ。べんん節ぶに。身がちるべたよあるべど。何をも打ち
とのべと回答べ。聽納べうべいえざり。賓や信言美なるべど。美言信
なるべず。愚なるべ。良薬の苦しを憎む。才あるべの亦人の諫を頂べ。
論語に。日来より。ぶのをしらべ。よくもあるべくもあ。果る。夫を
今も諫べねと。紬よ露偏る言の葉もたるべぬるのをとどべうぶ。ちひと

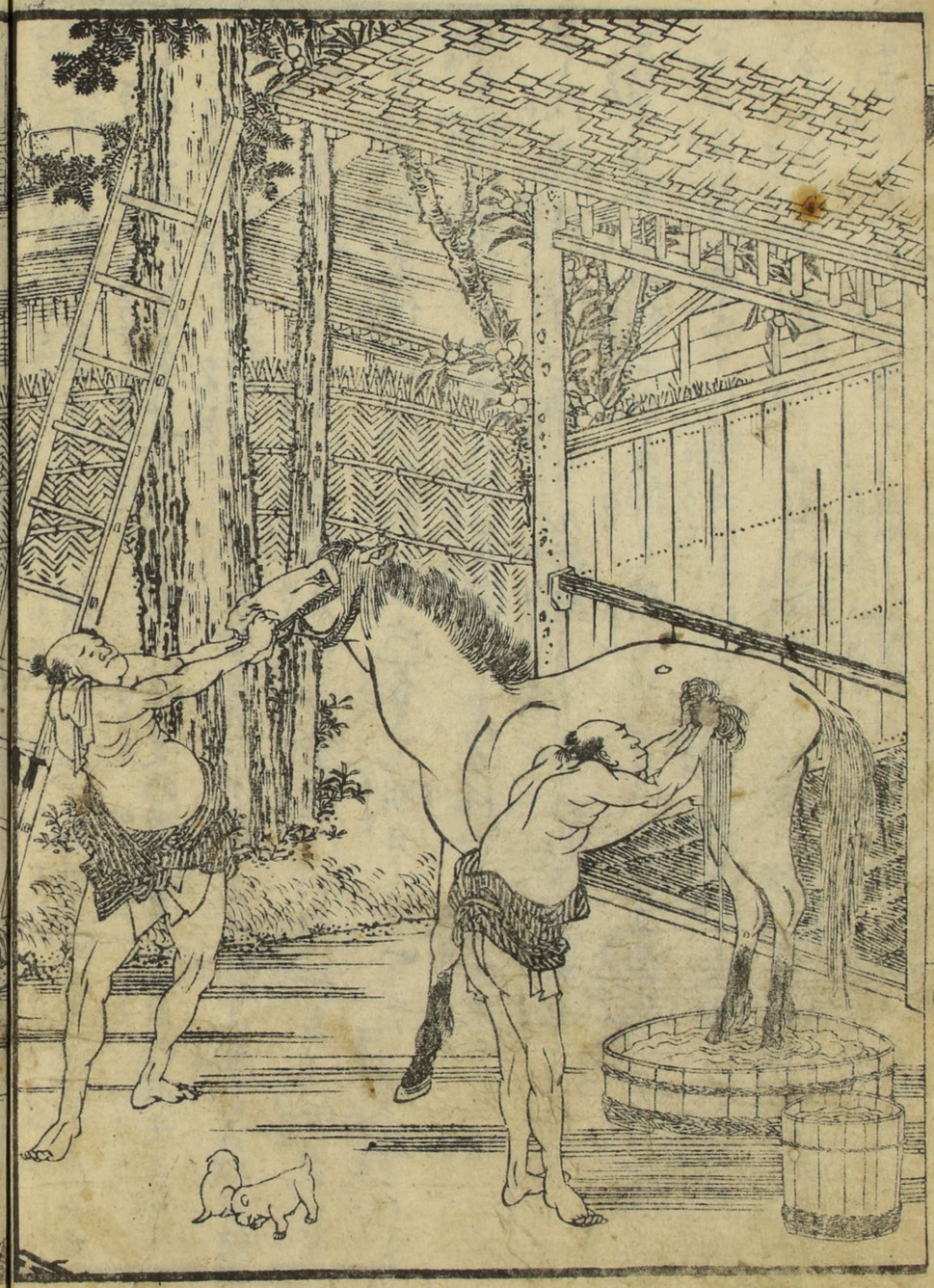
ゆくゑ尋いざりけり。かくてしばらくありけるに、次の日奈良より赴任して、蟻松典侍が宿所より呼につかはれ佐保の庄なる赤根まで行とぞ聞えける。容顔美麗なりとぞ。願くは對面を許させ給へといせられば典侍聽く。呼びいれて、その姿を眺るに、古い膝行頓首して、領主近曽米谷の楠を伐らせんとて、ものよ怪異あり、果しなくもの風声する実なりや。僕輙く、彼楠を伐て進ずべしとのたまふ。推察いたしとかや。典侍これを聞て、冷笑ひ泄いなびて、贋言をうとぞ。彼樹を伐らんとするものは、五化の命を預り、木精の祟あり。博士の説に、木の精を彭侯といふ。白澤の圖にもえうとぞ。命に缺智あらば、許をべしと回答する。半六容を改めて、さてさて僕が身の賤しをうく。食言とものよ歌いうぐ。貴人に對ひて、故なく

るをうとべし。千載経る樹に、木精あるをうとぞ。これを伐る小法あるをうとぞ。ありがたく学して功なるべしのそなはるべし。數の人を傷ひぬべし。たとへば家ふ思議に木を伐る法を相傳せ。領主の御威勢に官をこれるものもなく。百万の強敵といへども、屠とたのみざるに身をうく。長一株の楠を斫果さんと、世の胡慮とうりあらんか。傷痛し。僕世にこの國の民として、妻子を艱ふとぞ。領主の賜とおもへば命を的として。す忠を竭さんとするに、用られざるに不遇なるかとぞ。哀なりと。つゐに本意なげ小ぶんとなるを典侍忙しくなげいて、泄がるに、ごとくなる。莫大の忠節あり。たれども、究竟がるれば。びるしくも信ぜざるべし。いく為課をべし。中と思ひ、まだ完ずとして坐に復生して活るべし。誰か命の惜からざらん。木精の祟を惹ぶ課

もとよりみな僕を死すべし。又為課をとどい罪をこうれんかく危況をこうつくりもとをかく。虚実を察しのひねと。憚る気うとく答しうべ興指ぞうぞう納得し。まづ縁由を申えあげんとく。まづを退り。直に出仕して。首尾を述しうべ。順服ちよ欲くこうれも恕ようとこるんるを。朽ちくいろひるべく。眼前ある崇に怕ちとそこく彼樹を斫れといふとも。衆人兼引じとて弦止せしが。羊六とやうんが訴訴。やくもいと慇しこそ彼が隨意ろうつこ。成るこうざるを試をいこ為課とこうんこうん一廉の賞銭をこうもべしこくくといそどび。典指うけあらりて宿所に退ぬるこびまちをぬ半こ。領主の仰を説ちし。汝が一世の渥洗こうあり。ろひ侮ちとを損ずるとろうれ。ひ成就とび。賞銭ハ己の隨るべしといふまちを額つけてこれを肉。僕元来賞銭を願ひど。先祖ハ河内の正勝に仕こ。数代武夫なりど。楠

氏没落のこらひと寡こちこ。祖父のこうろ柴を賣。活業といるとど。更に武士の志をこうもるこうど。おらられ此度の恩賞に舊の武士とるこ。先祖の孝。泉の面目ろれにこうもるこうひ。ろこうこの朝に至ってこうべこうこに孰こあられこと希ハ典指ろ頭こ。そのこうハ仮細こ。汝ハこうを。の日に。この樹を伐るべこと。ハ。ま六茶こ。明日こうり七日ハ風ハ希こして法を行ひ。第八日に至らびこうるべこ。ろれども。件の大木を僕一己ハここ伐らび徒に日を費さん欲。既に斧を入れこ。その崇るをこうこと進こする後ハ。樵夫ハに仰こ斫らもこうこ。とハこに典指ろこ。僕こ。さこび第九日めにこうれ樵夫ハをれこ。彼山に到るべこ。こうこど時日を違こること。至に固こ約束し。羊六ハ暇あり。ろめがれ路に帰りこうる程に赤根羊六ハ。次の日こうり齋して。墓目の射法を修し。第七日めこう


あ、松虫さん
典侍よ
渇しまんろ
樹を
伐らんと
請ふ
あるじ主人



至りて。鹿尾菜の烹汁を桶に汲入れ。米苦山に擔かせて。楠の根ふ
決だうけ。さて諸具。斧麻索などを用意して。ぐるぐる彼樹のわふ釣
ぶ。奇なるかさ〳〵もの大木一夜の中に凋て。落葉堆高く散積
て。株の間に。大なる穴出来る。蟬に等しく蟻ども数限なもな
く。その穴を跋せて。皆悉く死〳〵ありまたいとの形象をえて因
怪を具設ひさとこの楠の木精い蟻くろう。楠の古木に棹脳を生
じて。虫の著とるべしといふ。虚言にあらざるべし。今に易しとひと
ちに。義塚を掘て集つ。用意の尖縄をさし着て。死たる蟻を
焼て。殊さらに大なる蟻一隻ぞは死もせずぐあり。れば前夜。三綸
枚と相語るい這奴なるべしとて。斧にて改を打碎にのりとも
小所とるなれば。煙たるく〳〵ちに弁て。西北を糸て空引つ。半天に

仁消失さり。正に是。蟻のちひも天に弁て。寛を天帝に訴ること。世の常
言も故あるなり。〳〵董昭之い。蟻を助て福を稟て。桓謙とい
りのい。蟻を殺して禍に遭ふ。載て搜神記に審なり。倫迴應
報の理い。蟻といども偏ることなし。されい羊たの樹を伐て。一因子を
とるに似されと。終に南柯の夢と覺て。その児孫七憂苦に迫り。
父に母にと鳴蓑虫の。蓑屋が軒の木うしに。花も紅紫も難波な
る。身のうへを謠て。これその縁起なり。

丹波都が傳

その昔羊たの。昌蒼躍に湛て。約束の日限なるに。これ一
枝をとろうとて。この奇特を示さるに。その功化に棄れるに。
ちろりとひとりとちて。さ〳〵と攀上て。街道のうへさ〳〵。生る枝

と索を著く。木の上に身を固め腰なる斧を脱ぎて、くつくつと
斫る。ぶつぶと斧の柄を脱く。麓へ磯と落るれば。伊賀路なる大和
を孤く。山城へ出るとやあらん。斧と裏の紙も。小妻木綿の帷子。
檜の笠に竹の杖。木こりいでたる山路をたどる〳〵来る盲人あり。親
子とこんえて〳〵呉の二人。年をぶ七つ八ツぢりなる。小女児と成て谷
より木垂し楠の下をぶらぶらとする処に。ぶまたがとり落ち〳〵斧彼盲人
が笠の上に閃くと。項をさくと砕拆れ。叫苦と一声叫びもあつど倒
小仏と〳〵ぶ。呪い周章つ。笠さゆるもと吹法る。涙に声も立つ居ら。
ちんすべもなくええとりとり。浩処に猫に猫篠い。猛に夫を諫るもぶたと
日の覚つかなく。午飯運ぶに假托と。三里の路をとぼ〳〵と。半七を伴い
つ〳〵なく麓にをりて。吐嗟と走りしるべるに。旅客が血に塗れて生

死も定るなくさるをいかにちんとなく泣叫ぶ。雅に人のむの中。そばえれば
痛しく。彼三峡の夜の猿腸を断ちなく。共に濡る袖の隙にうち
持ち割籠をとり落ちぶまセもひ〳〵〳〵。左右りに立繞て。涙くと
する小茶ひなし。ぶらぶらと猫篠が向上る峯の樹上なく。杖をあろ
ぶに夫ぶりぶとつと暁ぶいとぐるほ。涙ぶ〳〵も悲〳〵と。此首の二人い声
を揚ぶが夫ぶら。笠くぶら〳〵ぶりとなく猿客を。殺ひあくと吠びる。
声い谺に響あひて。よとるとぶ〳〵ぶまたがとり。伴い
索にとり推ぶて。枝ぶぶにあり来ぶりぶの力体をぶとぶとを
るひぶをぶ〳〵盲人を抱に起〳〵と。腰に着る吉祥撮ぶり。用意の定
心丹をとり出〳〵。その口に含すれば。猫篠いりて来ぶ。土瓶の温茶を
飲ぶとるど。さまぶ〳〵に抱ち〳〵息あれ〳〵ぶ。女児を

涙をうち拂ひ、やう〳〵いとまあらするとのみをもるべく揚おろし。
あさんい恙なくしかし。誰人ともうたてさくねど、人里遠き山路まくかくる
枕抱を受くと、世よ有ぐらん底なり。とりの言あり息きれく。苦痛
ふ湛どええるとべ、ぱ六いその耳よりをさ〳〵着いくよ旅客。これい佐保
の庄まくく。赤根孝六と呼るものくちくるよ領主の仰よりて、この峯な
る楠の枝を。目今ありさんとそるよ。どいぢも。斧の柄脱て傷しく。過な
ほび勸解よ由なし。むつう〳〵とひぬく。ぐ宿よ伴ひ。療治ちて進ら也
るん。所國の人ど名告ぬと。問も面なれ風情なり。盲人苦しく息のなな
よ潜くと落涙し。ちくぬ大和路よたぐり来く。仇ものもあくど恨もあ
さ。人のくよ斧よ命を預も。くく前世の悪業なくぬ。ぐ八原鎌倉の
管領家。扇谷殿よ仕く。丹波太郎孝基といひしものなるが。故あり

く退糧し。世くくる械のうたくよ。夫婦竊よ談合して。やうう〳〵跡を
つぐ。ものの。大和物語よあくねども。難波の浦の芦苅ぬあくる縁しとい
ひくくん。女児ぬさんが三才のとき。飽ねくくれよ妻を去。富貴の家よ給ぬ
蔓跡る日もあくぶ。やくび環會んとく。義洛へ上ち次の年。ぐ
くくど眼病を患ひ。遂よ聾者とりぬ。稚ち女児を養育よ。便着な
くぬび髪を剃。やくくとち嘗くる。四ちぐの糸よ繋ぐとも。命うとる
ち毘毘法師。丹波氏をそのくよ。丹波都と名告く伊勢よ移ち。皆田
家の城ちよ足を駐め。侘住居をくと五年あくく。年の今小月ぐど。
別ち〳〵妻いくよちん。音耗なれも理なく。ぐ相摸ちう移住て。伊
勢よあくともちくぶべ。くくちんとにくど彼も又いぐ。ち行よるかう
ん。義洛とひ〳〵をひあくよ。女児ぬさんよものを掖〳〵。引折く短ち旅衣妻

大和路ヱ
おさん
丹波ぢ
横死を
哀悼
ちんた
なろーの
ちんとろ

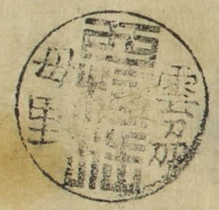
ちん六
おさん

よ逢んとおもひさらに行の都をそこに出し。只一まらの杖も折まとい死
生の事と路に露と消なんとろみさまとともかくてもこの痩ゝ存命べ
くもおもわれど。恩愛の事うさるさ。後うごとすれど磬蟬の息の内うう恐ひ
ぬるに。おらの女児があれがうう。八才とおひとど年弱ゝ。十一月七日の生生。丹
波左京孝基が女児ありさんと父がまづ〳〵書つけうる。臍帯に今もるほ。
女児が項に掛さーと。護身嚢の中にあり。又ほが脊負ー紙包に異國傳来
の樂器ゝ。その形院に似られど院ゝ。三條の線をうけく弾に千万
ゝ量の音を發と。鄭声ゝ。味あれば。私に三味線と名つけ。年来
秘藏するといくども。世に稀ゝ。ゝどさんれば夫婦が別ゝ。その
三味線の撥を拆再會の紀念とー。その片割にとあり。親のゝとと
憐られ。人の情に生音が意ー。色とありひとの。ゝんが母に名告あり。割

箏ともゝるべられがこれに女児にとせー。ちがうれるゝ。この三味線
にぶ戯と共に舞〳〵賜ゝ。後の世にとの樂器の行ゝ日もあらじ。
朽ぬ名のみを残れんとおひ遺と言の葉に。今も大和の城下郡。三味田の
里に佐保の庄丹波市と呼ぶ三の郷を三條の線に象り。是ゝの縁故
るべー。篇篠笛も痛〳〵と世に形見ゝ。
らめとおひー〳〵。ゝにるれば人さもぐの限ゝ。これに涙ゝ
ら。官〳〵人をあやまるに。爺ゝ殺ゝ。過ゝの浮世ぞう。
へ孫ー。後ゝに逆ゝ。これも木精の崇りと。バ人のらんるず。
やこの使果ゝ。女児れに吾倆がゝとも嬢とも字育ゝ。ゝ父
の跡世ー。ある。母れに環會ー。伝ゝ。窶ー〳〵れどゝ夫も由
緒ある人ゝ伝ゝ。一ゝのま七。今歳に十才ゝ。ゝ

愛子人のうをぶひうべう痛しやうれしもう世の因縁うう長成長後
まうしうあうさんどのとやうんを妻あり〳〵うの過世償ひうん寛を散〳〵
成佛あれと声も涙ようたうれてびひ尉ゆとう羊六も瞼ぶうまう〳〵。
綸篠い〳〵うもいひうよううれうのあうさんを養育う。羊七が妻とせど
ひうの者も終ようあうよ伏し。汚名を路頭ようあう遺とべし。とうひ定めし誓
言ようあう。丹波都いうと頼り〳〵。うとうをうのうえうう。岩間の石濤個く小流を
し鮮血いうぶうれど留めうう〳〵ううの世の名残。あうさんいうう〳〵と泣沈む。目
もうえあうれ養さうのひうりいうさうを便うう〳〵めうぶ分りうう冥土を
やうえへ。伴ひあへとかうに説声のをやうど今般ようもうううとうう女児の
貞胸苦し〳〵さうにうひやう〳〵。引退る綸篠が。勸う念仏ようまうもう〳〵悲
〳〵うう堪うあて。親子親ようが惜うと声とを合うて弥陀仏と唱る中ア

ねぶ
瞬るがう〳〵。丹波都いう綽断く〳〵り。げうう世涙い張ようが仏〳〵。四〳〵も帰ろう
別れとうもうるもう〳〵うれも終の友後〳〵うも先〳〵うも。夕の煙とう〳〵ぶう
う〳〵うう〳〵うれうのい命ぞうる程ようう綸篠いうあうさんを賺〳〵うう〳〵ぞまう
うもうう伴ひうう生ぶ。年六い月の暮〳〵うを行〳〵。密ようう丹波都が尻を杠りとう
うう佐保の願成寺ようう葬つ。彼が遺言ようう〳〵。三味線を其処い埋
め跡叮嚀い吊〳〵うとうん。



三七全傳南柯夢巻之一　終

三七全傳南柯夢巻之一終

を説く口寧小[illegible]ものなりけり。

[illegible]の願成[illegible]遺言[illegible]。三勝[illegible]埋

[illegible]半七[illegible]墓[illegible]丹波[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]六冊[illegible]東

西村

繪本大隅記卷之三

大坂

十
出版
許